昭和62年3月25日

立教大学 社会福祉ニュース

第11号 昭和62年3月25日発行　編集発行人 早坂泰次郎 東京都豊島区西池袋3 立教大学社会福祉研究所

復刊にあたって

所長　早　坂　泰次郎

1.

立教大学社会福祉ニュースが久々に復刊されることになった。以前、最後に発行された第10号は1980年10月のことだったから、7年半の休刊ということになる。なお第10号の刊行のことばの中には「今年後は当研究所が開設されて15周年にあたるが・・・」とある。つまりこの7年半の間に、当研究所は創立20周年を迎えたことになる。

しかしこの休刊の間、当研究所には何の発展もなく、何の活動もしていなかったわけでないことはいうまでもない。

先づはじめに、この間における研究所における最大の変化は、佐藤悦子教授の着任、そして副所長就任である。創立者故岩井祐彦教授が亡くなられて以来10年に及ぶ、社会学科の社会福祉講座の空席が満たされたこととともに、当研究所にとっては大きなできごとであり、喜びであった。またその間岡田玲一郎、高橋良臣、田中一彦の各氏を所員にお迎えすることができ、当研究所の戦力は著しく増強されている。そのことは活動面に明確に反映されているといってよい。

すなわち、この期間中、早坂、佐藤は当研究所の活動に関する研究について、再度にわたり文部省科学研究費の配分を受け、その一部は刊行されている。

また研究所紀要も、大学予算の裏付けを得て、毎年確実に出版されており、全国各大学及び関係機関との定期刊行物との交換が活発である。

さらにまた夏と秋、二回おこなわれる「福祉研公開セミナー」も、確実に参加者があるのみならず、一昨年度からは終に、夏に開催される「対人関係とカウンセリング」のセミナーは、一泊での研究会というところまで発展してきている。

関連団体のIPR研究会の活動も拡大する一方である。

それに、社会学科カリキュラム上の学科目である「社会調査実習」について、その手配と指導の一切が当研究所に任されている、という事態も依然として続いている。これらの業務処理のための臨時人件費が支出され、研究所助手（現在は小川憲治氏）が業務を担当している。

こうした状況の下では研究所に支えられている校宅10号館の一室では狭すぎ、もはやパンク寸前といっても過言ではないほどである。

それではこの間「社会福祉ニュース」が何故「かくも長き不在」であったのか。まことに官僚的な答弁で気がひけるが、理由はほとんどもっぱら「予算がなかった」からということにつきる。当研究所が上のような諸活動をおこなってきたのも、大学予算の裏づけがあってのことではなかった。いってみれば、Hand to mouth 活動が活発になればなるほどニュースまで手がまわらなかった、というのが実状であった。

今年度はじめてニュース刊行のための予算が承認されたのは、こうした活動が認められた結果であろうと思われる。大学当局には心からの謝意を表したい。

2.

私事にわたるが、来年は小生が停年を迎える。しかしここまでくればもう大丈夫という安心感がある。今後も当研究所の活動を支援していただきたいと念願している。

「社会福祉研究所公開セミナー」

(1) 公開セミナーの開催について

当研究所では毎年、年二回（夏・秋）公開セミナーを開催しております。多くの皆様方の御支援と所員の努力により昨年秋で開催回数も20回を数えるに至りました。

発題講演と小グループによる体験学習の組合せが当研究所公開セミナーの特色の一つであり、今までこの方法によって実り多い成果を収めてきました。ここ数年は次の2つのメインテーマの下で毎年のセミナーが企画されています。

- 対人関係とカウンセリング（夏期開催）
- 親子関係の病理　　（秋期開催）

本セミナーはもともと社会福祉の臨床や実践活動に携わっている当研究所所員が日頃の研究成果を社会福祉とその関連領域に従事する人々に啓蒙するために企画されたものですが、最近は、学生、主婦等受講者層も大分広がっています。

「対人関係とカウンセリング」に関しては1984年より2日間にわたる開催となり、1985年以降は一泊二日による体験学習を中心としたプログラムに変更され定着しつつあります。（詳細については紀要第7号（山本恵一研究員の論文）を参照）昨年も湯ケ原厚生年金会館で7月12～13日に開催し好評を博しました。

また「親子関係の病理」については種々のテーマで実績を重ね、昨年(11月8日開催）は「ファミコン時代の親子関係」について熱のこもった話し合いが行なわれました。

本年も下記の日程で開催の予定ですので、多数の御参加をお待ちしております。

＜1987年度公開セミナー開催予定＞

- 「対人開係とカウンセリング」第7回
  ── 体験学習を通じて ──
  日時　1987年7月11日(土)～12日(日)(一泊二日)
  場所　湯河原厚生年金会館
- 「親子関係の病理」第9回
  ── 親役割の変容とその影響 ──
  日時　1987年11月14日(土)
  場所　立教大学（予定）

(2) 親子関係のモノグラフ発刊

秋の公開セミナーのメインテーマである「親子関係の病理」のシリーズは昨年で第8回を数え、所員の間に今までの実績をモノグラフに集大成しようという機運が昂まってきました。そこでモノグラフ発刊の具体案について所員会および編集委員会（委員長；佐藤副所長、委員；藤本所員、小川助手）で検討を重ねた結果下記の構成で発行することになりました。「対人関係としての親子関係」と題し今年中に発刊の予定です。

基本的には過去8回のセミナー資料集を執筆者の皆様に加筆・修正していただき再編集の方針ですが、中には構成上一部新規に御執筆をお願いした方もあり、御協力いただいた皆様方には紙面をかりて深く感謝致します。

モノグラフ（親子関係）
　主題「対人関係としての親子関係」
第一章　はじめに
第二章　親子関係とライフサイクル
　(1) 幼児期
　(2) 児童期
　(3) 青年期
　(4) 成人期
　(5) 老年期
第三章　生活場面における親子関係
　(1) 家庭
　(2) 保育園
　(3) 学校
　(4) 職場
　(5) 地域社会
第四章　親子関係の病理
　(1) 幼児の問題行動
　(2) 登校拒否
　(3) 多問題家族
　(4) 中高年の病理
　(5) 情報化社会の病理
　(6) マスコミ
第五章　親子関係の基礎理論
　(1) 臨床心理学
　(2) 社会心理学
　(3) 社会学
　(4) 人間関係学

(3) 公開セミナー演者、演題一覧

「対人関係とカウンセリング」

第1回　1981年6月
- 早坂泰次郎　カウンセリングを支える人間関係
- 平木　典子　インテーク面接を考える
- 藤本　昇　カウンセリングにおける共感
- 佐藤　悦子　対人関係のダイナミックス

第2回　1982年7月
- 坂口　順治　グループ・プロセスとしてのカウンセリング
- 藤本　昇　カウンセリングにおける敵意
- 佐藤　悦子　面接のゆきづまり

第3回　1983年7月
- 藤本　昇　カウンセリングにおける気づき
- 赤沢　陽子　末期患者に対する看護の役割
- 佐藤　俊一　役割と人間

第4回　1984年7月
第5回　1985年7月
第6回　1986年7月
「体験学習を通じて」
発題者
早坂泰次郎

「親子関係の病理」

第1回　1980年3月
「子供の問題行動の底にあるもの」
- 藤本　昇　児童福祉機関の立場から
- 西澤　稔　児童福祉施設の立場から
- 長谷川　浩　児童心理学・臨床心理学の立場から
- 足立　叡　社会学の立場から
- 小寺　清孝　家族福祉の立場から

第2回　1980年11月
「親の苦しみ・子の苦しみ・そのわかりあいを防むもの」
- 早坂泰次郎　人間関係の心理学からみた親子関係
- 小滝美智子　母親の立場から
- 岡田玲一郎　保育施設の立場から
- 藤本　昇　第1回と同様
- 西澤　稔　第1回と同様
- 長谷川　浩　第1回と同様

第3回　1981年11月
- 小滝美智子　親子関係の病理学「子供の成長・母の成長」ー育ちあう関係をはばむものー
- 西澤　稔　親子分離の背景と三世代
- 足立　叡　我国における核家族化と親子関係　ー親と子どもと私たちー

第4回　1982年11月
- 岡田玲一郎　幼少期から老年期までの親子関係　ー実体験を通じてー
- 遠藤るり子　私を縛っていたもの
- 北林　才知　マスコミにみる親子関係の明暗ー尊属殺人と"文化人"の子育てを軸に考えるー

第5回　1983年11月
- 足立　叡　親子関係の世代論ー現代中高年とその家族関係ー
- 佐藤　悦子　三世代同居をめぐる夫婦の問題ー家族相談の窓口からー
- 西澤　稔　福祉施設よりみた三世代ー悲観論と批判されることを覚悟してー

第6回　1984年11月
「老いを生きる老人」
- 井上　勝也　老人と生きがい
- 市岡　静夫　老人ホームにみる親子関係
- 島田　妙子　家族とともに老人を看る
- 佐藤　悦子　家族の中の老人
- 岡田玲一郎　日常生における老人（特別寄稿）

第7回　1985年11月
「子供からみた親子関係」
- 戸塚　悌子　子供からみた親子関係
- 黒川　清　二十代から見た親子関係
- 西澤　稔　ある老人ホームに於ける親子関係について

第8回　1986年11月
「ファミコン時代の親子関係」
- 岩佐　壽夫　内向化する青少年心理
- 小川　憲治　情報化社会における親子関係
- 高橋　良臣　対人関係としての親子関係

＜公開セミナー資料集（バックナンバー）の御案内＞

上記公開セミナーのうち下記開催分につきましては資料集の残部が多少ございますので御希望の方は郵送料（240円）と実費（1冊500円）を添えて当研究所までお申込下さい。

- 「対人関係とカウンセリング」第1回，第2回，第3回
- 「親子関係の病理」第3回～第8回

「社会福祉実習」

当立教大学では、社会学部社会学科の中に、3・4年次生を対象に、社会福祉実習を、選択必修科目のひとつとして、設定しております。社会福祉に関する専門知識と技能を、臨床施設での実習を通して体験的に学習する場となっています。この講義では、主体はあくまで学生にあり、実習先の決定も、履習者が各々の関心と希望に基づいて行い、また受け入れて貰うための交渉も、個別的に行うことになっていますが、その際、学校側は必要な援助を提供します。実習期間は、基本的には2週間ですが、場合によっては、通年実習も認めます。尚、社会福祉研究所は、実習に際しての事務的な窓口となっており、また、講義では、所員が、学生の指導に当っています。

過去二年間で、学生が御世話になった、主な福祉関連施設は、以下の通りです。

＜児童相談所＞　神奈川県中央児童相談所、相模原児童相談所、小平児童相談所、台東児童相談所、市川児童相談所、東京都児童相談センター

＜社会福祉事務所＞　北区赤羽福祉事務所

＜病院＞　神奈川県立子ども医療センター、国立国府台病院、陽和病院、会田記念病院、東京都老人医療センター

＜養護施設＞　堀川愛生園、子どもの園

＜教護施設＞　愛知学園、埼玉学園

＜児童館＞　池袋第一児童館

＜精神薄弱児施設＞　コロニー嵐山郷、三愛荘、山の子学園

＜その他＞　国立身体障害者リハビリテーションセンター、登校拒否文化医学研究所、社会福祉法人福音会

「IPRトレーニング」

当研究所内に事務局をおく「IPR研究会」主催のIPRトレーニングは当研究所の活動と切っても切り離すことができません。なぜならば、当研究所では社会福祉の問題を広い意味での人間の福祉の問題、つまり対人関係の問題として取組んでいるからです。

IPRトレーニングのねらいは、ほんとうのTグループの体験を通じて、対人関係（Interpersonal Relationship）や、組織と個人の問題を方法論的に吟味し、その改善の方法を学んでゆくことにあります。このトレーニングを通じて、自他を真に人間として知りあい、真の生きがいを体験的に学んでゆくことをめざしています。

IPR研究会は1970年に日本で真のST（感受性訓練）を自からの手で進めたいと願う人々によって組織され、以来年4回のトレーニングを実施しています。当研究所の所長、副所長をはじめ数名の所員、研究員がIPR研究会のスタッフでもあり、IPRトレーニングのトレーナーをつとめています。

その意味でIPRトレーニングと当研究所の関係は単に研究所内にIPR研究会の事務局がおかれているだけではなく、トレーニングという臨床の場が、対人関係としての福祉の問題の研究の場でもあるわけです。IPRトレーニングの臨床場面を出発点とした研究論文が当研究所紀要に掲載される一方、当研究所主催の公開セミナー等の研究成果がIPRトレーニングに生かされるなど、活動上の交流もさかんです。

尚、IPRトレーニングに関する御問合せや参加申込については当研究所内「IPR研究会事務局」へお願いします。またトレーニングの内容等については下記文献を御参照下さい。

＜参考文献＞

早坂泰次郎著　「人間関係のトレーニング」（講談社）
〃　「人間関係の心理学」（講談社）
〃　「人間関係学」（同文書院）

昭和61年度社会福祉関係修士論文・卒業論文題目一覧

社会学研究科応用社会学専攻修士論文

「コミュニケーションにおける言語と身体」
金森　敦

「日常的現実におけるコミュニケーション－M.ブーバーとG.H.ミードの自己概念を手がかりに」
細入　佳子

社会学部社会学科卒業論文

「人と労働」　真見　茂樹
「日本人の外国人観を考える」　馬場千津子
「教育における人間関係－人間としての教師をめざして－」　池田　尚子
「異文化の中の日本人」　山口　達朗
「現代日本の勤労者における労働と余暇」
森田　郁夫
「演劇の中の生～生の中の『演劇』」　穴倉恵
「小実団活動とメンバーの相互作用」鈴木晴子
「いきいき生きるには－生きる姿勢としての主体性へのてがかり」　笠置　恭輔
「現代のルネッサンス－作家　三島由紀夫を考える」　和智　章宏
「クワントにおける言語の事実性」瀬田松佳織
「子どもを見る目－方法論的－考察」寺田浩子
「スポーツにみる日本人～武道と大学体育会武道部の人間関係を中心例に」　三田　茂徳
「人間性と自己実現の疎外」　西脇　芳紀
「青年期における純粋自殺」　沼田　和子
「食卓の風景から見た現代の家族関係」
宮川志津子
「フロムにおける自由の概念」　水谷　充
「エリック・バーンの交流分析についての私考」
小池　秀樹
「父親と娘－娘の性的同一性確立までに父親が及ぼす影響」　伊澤美恵子
「非行と社会－逸脱行為を生み出すもの」
若松　啓人
「日本人にとっての集団関係－ボーイ・スカウト運動を通じて」　露木　充
「現代日本における母性のあり方について」
名越　稲美
「性役割同一性獲得からみた思春期女子の実存」
大矢　恵子
「コミュニケーションのメタローグ」木村　均
「結婚式からみた現代の日本社会」　植山雅文
「職業選択にみる青年意識」　松原　健

創立20周年を迎えた当研究所のめざすもの

立教大学の建学精神（キリスト教に基づく教育）を具体的に実現していく研究所として1967年4月1日に発足し，従来の「社会福祉」という既成概念にとらわれず，広く総合的な視点に立って人間福祉－1人1人の幸福－の実現に寄与すべく活動を続けてきました。本年で創立20周年を迎えます。「社会福祉ニュース」の復刊に当たり、創立の趣意を皆様に御紹介します。

立教大学社会福祉研究所設立趣意書

最近におけるわが国の科学技術の発展、およびそれに基づく産業経済の躍進にはまことにめざましいものがある。

しかしながらその反面，こうした発展や躍進の谷間に取り残された、日かげの人々の群がいることは、依然として事実である。さらに加えて，上のような面での発展や躍進が一般に人々の関心を物的・経済的世界に向わせ、その結果、経済的に恵まれた人々の間には、人間の内面的世界への関心と配慮に献身することを二義的に考えたり、テレくさがったりする風潮が生まれてきつつあるように思われる。

こうした現代の状況を思うとき、現実の社会生活のいろいろな領域で、人々が現に直面するさまざまな問題を、何よりもまず人間の問題として受けとめ、人間的に配慮し援助しようとする努力は、今日もっとも必要とされるものであろう。

本研究所はこうした問題意識にもとづき、家庭・学校・職場等々、日常生活の場面でのさまざまな問題を広義の社会福祉的立場からとらえ、理論的研究と同時に、その解決のための実際的相談援助活動をおこなおうとするものである。

立教大学建学の精神に鑑みて、本研究所が本学に設置されることは、むしろおそきに失した感さえないとはいえない。

総長、社会学部教授会ならびに学内の関係各位の御援助と御理解をお願いしたい。

昭和42年2月2日

社会福祉研究所紀要（『立教社会福祉研究』）バックナンバー一覧

現在、社会福祉研究所では年一回ずつ、紀要を発行し、各所員の論文や翻訳などの研究活動の発表の場としております。通算8号を数える紀要の掲載内容は以下の通りです。

第1号（1980年）

〔論文〕
三世代間の自己認知と他者認知
早坂泰次郎・畠中　宗一
生活構造の理論 ― 方法としての生活構造論序説1 ―　古谷野　亘
自己（The Self）の問題への基礎づけ ― 社会的なこととの関連において ―　佐藤　俊一
〔資料〕
いわゆる「福祉見直し論」を見直す ― 老人ホーム建設の体験を中心に ―　岡田玲一郎
わが国の少女非行についての史的考察のために(1) ― 横浜家庭学園の沿革を通して ―
西沢　稔
〔書評〕
原慶子『老いを凝視めて ― 特別養護老人ホームでの3年 ― 』
梶原　達観
昭和52年度社会福祉関連科目（社会学部社会学科）
昭和51年度社会福祉関係卒業論文題目

第2号（1981年）

〔論文〕
フロム・ライヒマンにおける「役割」の問題 ― 精神療法とTグループ ―　早坂泰次郎
特別養護老人ホームにおける入居者の意見と生活歴の調査その1 ― 個別面接を中心として ―
岡田玲一郎
臨床社会学序説 ― 社会福祉の可能性を求めて ―　足立　叡
〔資料〕
わが国の少女非行についての史的考察のために(2) ― 横浜家庭学園の沿革を通じて ―
西沢　稔
〔翻訳〕
The Professional Base of Social Casework.　Annette Garrett
ソーシャルケースワークの専門職としての基礎
アネット・ギャレット著　藤本舜訳
〔書評〕
辻村泰男監修『障害児教育事例集　上・下』
西沢　稔
昭和53年度社会福祉関連科目
昭和52年度社会福祉関係卒業論文題目

第3号（1982年）

〔論文〕
行動と意識 ― 意識をどうとらえるか ―
早坂泰次郎
ICUにおける患者体験と心理的援助についての諸問題　長谷川　浩
青壮年の老い観　岡田玲一郎
〔資料〕
わが国の少女非行についての史的考察のために(3) ― 横浜家庭学園の沿革を通じて ―
西沢　稔
〔翻訳〕
The Worker-Client Relationship
Annette Garrett
ワーカークライエント関係
アネット・ギャレット著／藤本　舜訳
〔書評〕
藤本　舜『児童福祉ケースワーク』足立　叡
昭和54年度社会福祉関連科目
昭和53年度社会福祉関係卒業論文題目

第4号（1983年）

〔論文〕
J.H.ヴァン・デン・ベルクのMetabletica について　田中　一彦
＜役割と自己＞の問題　宮本　和彦
「モラトリアム」の現代的問題　松尾　隆義
〔資料〕
わが国の少女非行についての史的考察のために(4) ― 横浜家庭学園の沿革を通じて ―
西沢　稔
〔翻訳〕
A Conception of The Growth Process Underlying Social Casework Practice
Jessie Taft
ソーシャルケースワーク臨床における成長過程の概念　藤本　舜訳

第5号（1984年）

〔論文〕

福祉と専門性 ― 学生相談の視点から ―
早坂泰次郎

〔翻訳〕

The Field Supervisor as Educator
Eleanor Neustaedter
教育者としての実習スーパーバイザー
藤本　昇訳

〔資料〕

わが国の少女非行についての史的考察のために(5) ― 横浜家庭学園の沿革を通じて ―
西澤　稔

第6号（1985年）

〔論文〕

行動と意識ー福祉人間学の基礎づけのためにー
早坂泰次郎
家族への心理・社会的援助について ― 家族福祉試論 ―
佐藤　悦子
Tグループにおける"変容体験"についての研究 ― IPR調査票の集計とその考察 ―
山本　恵一

〔資料〕

わが国の少女非行についての史的考察のために(6) ― 横浜家庭学園の沿革を通じて ―
西澤　稔

〔翻訳〕

"変化について" ― 問題形成と問題解決 ―
ポール・ワツラヴィック他著　佐藤悦子訳
Transference in Casework（ケースワークにおける感情転移）　藤本　昇訳

第7号（1986年）

〔資料〕

わが国の少女非行についての史的考察のために(7) ― 横浜家庭学園の沿革を通して ―
西澤　稔

〔論文〕

変貌する西ドイツの児童養護ーノルドライン・ヴェストファーレン、ヘッセン、そしてラインランド・プファルツの各州を尋ねてー
藤本　昇
登校拒否児をめぐる人々の混乱現象　高橋良臣
子どもは変わる　高橋　良臣
福祉関連の施設等従事者の意識変容について
山本　恵一

〔翻訳〕

変化について(2) ― 問題形成と問題解決 ―
ポール・ワツラヴィック他著　佐藤悦子訳

第8号（1987年）

〔論文〕

ソーシャルワーク実践モデルとしてのコミュニティ・アプローチ ― 家族福祉試論(2) ―
佐藤　悦子
児童福祉における社会資源の活用 ― その基本的理解をめぐって ―　藤本　昇
ソーシャルワークにおける契約概念ーアンソニー・Nマルキオとウィルマ D.マルローの見解を中心としてー　山本　祐策
Acceptance と Confirmation ーその1ーM.Buber の C.Rogers 批判；その心理学的意義の研究ー　山本　恵一

〔資料〕

わが国の少女非行についての史的考察のために(8) ― 横浜家庭学園の沿革を通じて ―
西澤　稔

〔翻訳〕

変化について(3) ― 問題形成と問題解決 ―
ポール・ワツラヴィック他著／佐藤悦子訳
SOME REMARKS ON SENSITIVITY IN U.S.A.
（米国におけるセンシティビティ〔グループ〕に関する所見）
Robert L.Vosburg, M.D. 著／小川憲治訳

以上の各紀要を御希望の方は、郵送料（240円）と実費（1冊500円，最新号（第8号）のみ1,000円）を添えて下記へ御申し込み下さい。

〒171　東京都豊島区西池袋三丁目
立教大学内　社会福祉研究所
℡03-985-2663

社会福祉研究所スタッフ紹介

＜スタッフ一覧＞

所　長	早坂泰次郎	立教大学社会学部教授
副所長	佐藤　悦子	立教大学社会学部教授
所　員	足立　　叡	淑徳大学社会福祉学科助教授
	池田　秀夫	
	江口　篤寿	立教学院診療所医師
	岡田玲一郎	社会医療研究所所長
	小滝美智子	竹中工務店カウンセリングルーム・カウンセラー
	梶原　達観	田宮病院心理・ソーシャルワーカー室スーパーバイザー
	坂口　順治	立教大学文学部教授
	櫻井　芳郎	国立精神・神経センター精神保健研究所精神薄弱部長
	高橋　良臣	登校拒否文化医学研究所代表
	田中　一彦	淑徳大学社会福祉学科助教授
	田宮　　崇	田宮病院院長
	西澤　　稔	福音の家　施設長
	長谷川　浩	東京女子医大看護短期大学教授
	平木　典子	立教大学学生相談所カウンセラー
	藤本　　昇	文京女子短期大学教授
	山本　祐策	八代学院大学助教授
研究員	岩佐　壽夫	家庭ケースワーク研究所主宰
	黄　　超良	台湾政府ソーシャルワーカー
	宮本　和彦	
	山本　恵一	立教大学社会学部助手
研究所助手	小川　憲治	立教大学大学院在学
福施実習担当	嶋田知香子	立教大学大学院在学

＜私の研究と実践＞

所長　**早　坂　泰次郎**

「復刊にあたって」に記したように、来年3月で小生停年を迎えます。「35年もいたのだから感傷的になるだろう」といってくれる人がいる。申し訳ない(?)が、一向にそのような心境は湧かない。そんな感概にふけっているひまがないほど、最後まで忙しい、というのが実態である。しかし考えてみればやっぱりいろんなことがあったのはたしかだ。まだ私が文学部にいたころ、亡くなった岩井さんが"一緒に福祉コースを担当してくれないか"と声をかけてくれ、「タヴィストツク研究所(イギリス)がやっているような地域と結びついた活動のできる研究所をつくろうよ」と熱っぽく話していたのも鮮明な記憶だ。今のわれわれの研究所の実状はその理想には程遠いが、"開かれた研究所"というあり方は大事にしていって頂きたいと心から念じている。

副所長　**佐　藤　悦　子**

論理実証主義が主流である社会学部の中で臨床系(臨床社会心理学)の教員として仕事をしています。研究上では、個の経験の一回性、ユニークさを如何に他者に劈かれたものとして記述するかとの方法論上の問が頭を離れません。具体的には、家族関係を対人コミュニケーション活動の完結、不完結という視点から研究する一方、民間の心理相談室と医療クリニックで個人や家族のカウンセリング、また集団治療にたずさわっています。忙しさにかまけて生活人としての側面が犠牲になっているムキがあるので、その点の是正が個人的課題です。

所員　**足　立　　叡**

当社会福祉研究所に所員として参加して今年で15年目をむかえようとしている私にとって、現在所属する大学で、学生諸君と一緒に、社会福祉の教育と研究に、それをどこまでも方法としての人間関係への視点から臨床的な態度と感覚を見失なわず取り組んでこれた(と思っている)のも、この15年間の当研究所での活動や研究所メンバーひとりひとりとの出会いのおかげだと改めて実感している。今後とも、当研究所におけるIPRトレーニングやセミナーへの参

加を通して、そこでの体験を軸に、小生の専門とする社会学及び社会福祉学の臨床的視点にもとづく方法論的明確化をめざしていきたい。

所員　岡　田　玲一郎

最近、経済優先の福祉の傾向がみられ、気になるところである。気になるから、人間（優先ではなく）の福祉の仕事にかかわっている。医療の世界から、老人ホーム、保育所の仕事をやりながら、この研究所でも10数年にわたり、なにかと学んできた。

しかし、いつまで経っても奥は深い。そして、やることがいっぱいありながら、与えられる条件は限られてくる。その限られた条件で、精いっぱいやっていくしかないのだろう。大学生や専門学校の学生達を教えながら、医療と福祉の現場を本当に理解してもらいたいと思うのは、医療や福祉があまりにも彼等から遠い存在で、しかも美化されてあるからだ。若年層の福祉志向は、現実の前で挫折することが多いだけに、その現実を話しつづけている。これからも、それを続けていくのだろう。

所員　小　滝　美智子

立教大学で心理学を専攻して早坂先生に教えを受けて以来、病院、保健所等で心理相談の仕事にかかわってきました。

現在は、竹中工務店カウンセリングルーム、総務庁恩給局職員相談室の二ケ所で週三日カウンセラーとして働らいております。

子供が生まれ、地域の人々とのつながりが多くなるにつれて、子供や母親をとりまく人間的環境、学校の問題、ＰＴＡ等生活の中で出会う様々の問題に心を促そられ、地域の中でそれらにかかわっていきたいと思い、現在は五年前より続けている地域の母親たちとのグループ活動で思秋期を迎え、とまどう女性の問題にかかわっています。女性の問題は会社人間の男性の問題と強く結びついており、関心を持ってかかわっています。

所員　梶　原　達　観

精神科を主体とした病院でＰＳＷのスーパビジョンに従事しているが、私が身を置いているこのような社会関係の中で人間の福祉がどの程度実現出来るかについて深い関心を持っている。しかもその実現に当っては人間関係の倫理（禁慾）を前提条件としている。そのような関心と態度で自律という人間の福祉目標が実現出来ればそれは社会福祉であり、出来なければ社会福祉ではないと思う。私としては実現出来るに違いないという仮定に身をかけて、スリル溢れる毎日を過している。このような生活の体験を意味の論理的一貫性を持った経験として整理した際の学問や技術がソーシアル・ワークであると思う。だから私は、社会福祉＝すばらしい事とは思はない。

所員　櫻　井　芳　郎

現在、いままでの研究の総まとめとして心身障害者（児）福祉臨床の体系化に取り組むかたわら「心身障害の判定基準に関する研究」（厚生省心身障害研究）、「精神薄弱者（児）の心身の健康増進・体力づくりに関する研究」（健康・体力づくり事業財団委託研究）などを各地の研究協力施設と提携して進めている。また、全国心身障害児福祉財団の「障害児（者）の療育援助および社会理解推進事業」の企画委員として参革している。

最近、『障害児（者）の生活と福祉』（学文社）『精神遅滞児（者）の医療・教育・福祉（編訳）』（岩崎学術出版社）を出版し、「高齢精神薄弱者および早期老化現象の実態とその対策」（発達障害研究）を執筆した。毎日を”一期一会”をモットーに多忙な日々を過している。

所員　高　橋　良　臣

登校拒否にかかわる諸問題に取り組んでいる。山梨県に大須成学園という登校拒否児の学園を持ち横浜市に三ツ沢三愛センターという学習共同生活寮を持っている。各地の親の会の運営に協力し、親子のカウンセリングをも行なっている。

最近の課題は登校拒否の根源的かつ本質的問題である人間関係学の確立と研究であり、思春期の子どもたちによるグループ効果の研究である。全て実践を通じて行なうことを主義としている。また登校拒否児にかかわり、子どもの成長にいい役割を果すことができるような青年の育成をも行なっている。

私自身は神学・獣医学・農学の専門であり人間関係学は初心者である。家庭では第一種兼業主夫で、育児、炊事、掃除、洗濯等をよくしている。

所員　田中一彦

公認会計士になろうと青山学院大学経営学部に入学して、会計事務所にアルバイトで通ってみたもののどうにもなじめず、一念発起して心理学を志し立教大学文学部心理学科へ編入した。卒業後大学院を社会学研究科へ転じて、博士課程四年で中退し、現在の淑徳大学社会福祉学部へ奉職して十一年目、というのがごく簡単な私の過去の軌跡である。

この間にはむろん、あの大学紛争を含めていろいろな出来事があったわけだが、それらに細かく触れようとすると、このスペースでは舌足らずにならざるをえないのでやめておく。

研究課題は、学えてみると、学部時代より一貫して、われわれの関係的な心理的存在性格の解明とその方法論であって、そのときどきの関心は推移しても、結局はそこへ収斂するように思われている。

所員　西澤　稔

30年間児童福祉施設だったので、現在老人施設にいることを知った仲間は一様に驚き、その訳を知りたがります。その時は、"自分自身の勉強をしています"と答えている。"非行少年"と称される研究の時には、少年の方からその親を観、そしてその親がどんな成長したかを通し、いわば三世代論を展開してきました。しかし、現在は97歳のおばあちゃんの方から、その子供、孫、の順で三世代を観ることができるので、前者の仮説的解釈に肉付けできるようになりました。紀要に連載していた"日本非行少女史"は今回で第一編の"感化法時代"が終了しました。8回分をまとめ社会事業史学界にのぞむつもりです。人居者にとっては生活の場である施設は休みがありません。それを理由に研究がおろそかになるのがつらいです。

所員　長谷川　浩

東京女子医科大学看護短期大学で主事と教授とを兼務しております。主に看護学生に心理学と社会心理学を、助産婦学生に人間関係論を講義しており、さらに学校の運営にたずさわっております。研究の関心は専ら医療と看護にあり、「先天性心疾患児の社会適応」「ICU・CCUの心理問題」などを取り上げております。

所員　平木典子

立教大学にカウンセラーの仕事を得て20年の年月がたち、その間青年の心理臨床に加えて、「カウンセリング」「パーソナリティ論」の授業をうけもってきた。

青年の心理臨床の内容はこの20年間に非常に変化し、その必要に迫られて家族療法の分野に足を踏み入れ、その結果システミックなものの見方に非常に魅力を感じている今日このごろである。

一方、カウンセリング又は心理臨床の分野におけるニーズも、カウンセリングを学び、心理臨床家として自己鍛練を積むことへの関心から、心理臨床家又はカウンセラーの養成へと広がり、現在グループ・スーパービジョンとしてのケース研究、被訓練者への効果的訓練アプローチ・プログラムなどを試行している。その一つにアサーション・トレーニングなどがある。

所員　藤本　舜

保育者を養成している文京女子短期大学保育科で、「社会福祉方法論」「精神衛生」、さらに「保育実習」などを教えています。同保育科では、1．2年生、合計350名全員が、「保育実習」、「児童・心身障害者福祉施設実習」、そして「幼稚園実習」に出ますので、その指導のために実習委員会を構成され、その委員長を務めています。学生は、それらの実習のたびに変わってきます。

立教大学では、「三類特殊講義(2)児童福祉」「社会福祉概論」などを担当させていただきまして、今年で丁度、10年になります。そして土、日曜日には、グループで、社会・児童福祉理解のためのパーソナリティ発達論の外国書を読んだり、児童福祉施設見学などをしています。

所員　山本祐策

I・P・R出身の私です。先月末、ヴァン・デンベルグ先生を迎えての大磯セミナーに参加し、感銘を新にしました。先生は、庭の、野の、森の小さなものたちの、わけてもその死に深く哀措の念を抱く少年であったと述懐されました。早坂教授も先生をそのような方であると紹介されていますが、そのことはまた教授御自身を語るものと思われます。私ごとながら、一昨年10月、出張先から帰宅すると飼い犬のチワワが息も絶え絶えの状態で、長女（中学2年）の帰りを待っていたかのように死んでゆきました。私

と娘は、その身体に手を重ねて泣きました。娘と私が本当に心が通うようになったのはその時からであるように思います。ちなみに私は、感性とは無縁と思われる民法を担当していますが、現象学が、この法領域へ血脈を注ぐのではあるまいか、と秘かに期しています。

研究員　岩佐寿夫

青少年問題、特に非行臨床の相談を20年間公務員の立場で取組んできたが、組織内での限界を痛感して、無謀にも独立して個人の相談室を開設して一年になる。経営能力、努力共にゼロ。しかし精神衛生はきわめて良好の状態であると自我自賛をしている。

現在、生活のためにだけではなく、人間の発達段階に少しでも広くかかわろうとの目標課題から、兼務の仕事として世田谷区教育委員会生活指導相談員、安田学園中高校教師スパーバイザー、慈恵柏看護専門学校講師などをやることで、今後も常に実務者でありたいと思い続けている。

研究員　黄　超良

私は、Taiwan Provincial Training Institute For Social welfare Workers というところで、Specialist として、勤めております。台湾地区のソーシャル・ワーカーの在職訓練課程内容について全般的に検討し、設計しております。要するに、頭にいっぱいはいった早坂研で学んできたものを、しばしば台湾でのソーシャル・ワーカーたちのみなさんに紹介できます。人間関係での心理 interaction 及び日本の社会福祉の現状と展望、又、日本人とは一体、何か等を、これから、もっとくわしく説明していきたいと思っております。そのために、又、日本で勉強していた本及び講義、資料などをくりかえして読んで強化させ、早坂先生の許可をいただいて、先生の本もこれから訳そうと思っております。先生の御健康と御無事を祈っております。どうか、みなさんも御元気で。

研究員　山本恵一

事務局、研究生、助手を経て、一昨年度より研究員としてここ10年間を社会福祉研究所とともにやってきました。研究活動は、早坂教授のもとで、現象学的アプローチによる社会心理学、殊に人間関係学の概念化を試みています。社会福祉との関連でいいますと、福祉とは何より実践であり、変化に関与していくことだと考えますので、この点、実践的（臨床的）であることと変化の記述ということを方法論的に明確にすることを通じて、現場と理論との架け橋に幾分とも貢献できたらと思っている次第です。

今年度より社会学部の助手になりました。勤務の都合で今までのようには福祉研に足を運ぶことができなくなり、福祉研で育ってきたも同様の私にとっては、至極残念なことですが仕方ありません。彼の地でのコミットメントを大事にしたいと思っておりますし、できる限り福祉研にもコミットしつづけたいと願っています。

研究所助手　小川憲治

15年余り携わってきたコンピュータシステムエンジニアの仕事を辞し、勤労学生（院生）になってから早くも1年が経過した。当研究所の助手、コンピュータ専門学校の非常勤講師をつとめる一方、ＩＰＲトレーニング、カウンセリング等の臨床場面での修業を重ねている。その体験を通じ、大学院で現象学的臨床心理学、社会心理学を学んでいる。

私の研究テーマはコンピュータ社会におけるテクノ疎外と人間性の回復の問題である。急速なコンピュータ化の中で、我々は対人関係の希薄化、仕事における生きがいの喪失など人間存在の根本をゆるがす問題に直面しているといってもいいだろう。特に劣悪な労働環境下で働くコンピュータ技術者の疎外の問題、ファミコンやパソコンと子供達の友人関係、親子関係の問題等に関し具体的な検討を進めてゆく所存である。

大学院生　嶋田知香子

今年、立教大学大学院２年次生となるが、専攻は応用社会学であり、佐藤研究室に於いて現象学的臨床心理学、社会心理学を学んでいる。現在、最も私が関心をもっているテーマは、人間の身体性についてである。立教大学の学部生であった頃から、私の研究テーマは「病める人をわかるということ」であり、そのためには、“人間は身体的リアリティである”という理解が大前提である、と考えている。また同様に「わかる」ための具体的な手掛かりである“言語”に関しても“社会的事実性としての言語”という視点から今後、研究を進めてゆきたいと思っている。

現在は大学で研究を行うかたわら、臨床場面での実践も積むよう少しずつではあるが、努力を続けている毎日である。

立教大学社会福祉ニュース第11号 目次

ページ
- 復刊にあたって（早坂泰次郎） …… 1
- 社会福祉研究所公開セミナー …… 2
  (1) 公開セミナーの開催について
  (2) 親子関係のモノグラフ発刊
  (3) 公開セミナー演者，演題一覧
- 社会福祉実習 …… 4
- ＩＰＲトレーニング …… 4
- 昭和61年度社会福祉関係修士論文・卒業論文題目一覧 …… 5
- 20周年を迎えた当研究所のめざすもの …… 5
- 社会福祉研究所紀要
  バックナンバー一覧 …… 6
- 社会福祉研究所スタッフ紹介 …… 8
  ＜スタッフ一覧＞
  ＜私の研究と実践＞
- お知らせ …… 12

＜お知らせ＞

(1) **1987年度公開セミナー開催予定**

- 「対人関係とカウンセリング」
  ― 体験学習を通じて ―
  日時：1987年7月11日(土)～12日(日)（一泊二日）
  場所：湯河原厚生年金会館
  講師：早坂泰次郎所長および所員スタッフ
  資料：「現象学を学ぶ」（早坂泰次郎著）他
  費用：一般 38,000円（学生 28,000円）
  定員：40名（定員になり次第締切ります。）
- 「親子関係の病理」
  ― 親役割の変容とその影響 ―
  日時：1987年11月14日(土)
  場所：立教大学（予定）
  （詳細は1987年10月上旬以降にお問合せ下さい。パンフレットをお送り致します。）

(2) **モノグラフ発刊予定**

「対人関係としての親子関係」（近刊）
当研究所の公開セミナー（親子関係の病理）のシリーズ8回分の集大成です。
内容は2ページを御参照下さい。
刊行予定は1987年8月頃です。
（予価 2,500円）

(3) **紀要第8号（1986年度）発刊**

詳細は7ページを御参照下さい。

〈 編集後記 〉

ともかく発刊にこぎつけてほっとしている。7年半の休刊を経て，久しぶりに当研究所の広報紙を復刊できたことはスタッフ一同の喜びである。本ニュースが当研究所の活性化につながってくれることを念願したい。

今回は期間的にじっくり編集に時間をかける余裕がなく，休刊中を含めた最近の当研究所の活動やスタッフの近況を御紹介することを主眼とした。読んでみていささか物足りない感じを拭えないが，内容の充実等については次号以降に心がけてゆきたいと思う。

発刊に御協力いただいた皆様に感謝したい。

（小川）

生まれて初めての編集作業ということで，とにかく大変でしたが，この社会福祉ニュースが一人でも多くの方の目に触れてくれれば苦労も帳消しです。御意見・御批判など，たくさんの反応をお待ちしています。（嶋田）

立教大学社会福祉ニュース　第11号

昭和62年3月20日印刷
昭和62年3月25日発行

編集兼発行者　早坂泰次郎
印刷所　株式会社絢文社
発行所　立教大学社会福祉研究所
東京都豊島区西池袋3丁目
電話　03（985）2663